

ハラスのいた日々

中野孝次



のいた日々 孝次



文藝春秋

著者紹介

一九二五年、千葉県に生まれる。
東京大学文学部卒業。カフカ、ノ
サックなど現代ドイツ文学の翻訳
紹介、日本文学の批評、そして小
説、エッセイなど多彩な執筆活動
を続ける。堅実な作風で、現代社
会にいか生きるかを真摯に問う
作品には、高い評価と信頼が寄せ
られている。主な著書に、『プリ
ューゲルへの旅』（日本エッセイ
ストクラブ賞受賞）『実朝考』『麦
熟るる日に』（平林たい子賞）『自
分らしく生きる』『対談小説作法』
『はみだした明日』『生のなかば』
『夜の電話』がある。

ハラスのいた日々^{ひび}

一九八七年二月二十五日 第一刷
一九八九年三月二十五日 第十五刷

著 者 中 野 孝 次

発 行 者 豊 田 健 次

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三―二
電話代表(〇三)二六五―二二一

印 刷 精 興 社

製 本 矢 嶋 製 本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

目次

そもそもの初め 7

名の由来、その命名の効果 14

始まった犬との日々 20

牛乳パックをくわえてくる 27

ボール探しの天才 32

仇な牝犬にひっかかる 41

遊びをせんとや生れけむ 52

ボエナとカトリン 68

犬の表情、および待つ犬 78

犬と酒の肴の関係 87

犬とともに老いる 95

生涯の一大事件 103

事件の後で 154

老いたる 161

大災難 171

つらい日々 179

いないという事 187

亡きあと 202

装画

熊谷樞^{かき}さんによるハラス素描の陶絵

(本文一四八、一五六ページ参照)

ハラスのいた日々

そもそも初め

人と犬との縁というのも、考えてみると実にふしぎなもので、ある意味では人間どうしの出会い以上にふしぎかもしれない。犬なんてみな同じようなものだ、前は思っていたが、あとになってみればその犬以外の犬ではだめだという、かけ替えのない犬になっているのだから。

二葉亭四迷の小説『平凡』に出てくるポチの話は、読む者だれをもホロッとさせるが、あそこに二葉亭が書いた気持ちこそ、あらゆる愛犬家にとっての犬の姿なのだと、飼ってみてかわかった。

「その矢張り犬に違いないポチが、私に対ふと……犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか？……何方だか其は分らんが、兎に角互の熱情熱愛に、人畜の差別を撥無して、渾然として一如となる。」

そういう存在になるのである。

ともあれ生涯に犬を飼うときがあらうなどと考えたこともなかったわたしが、ひょんなことから犬を飼うはめになり、その犬が人生の後半生の十三年間、欠くに欠かせぬ大事な伴侶になった。この十三年間のわれわれの歲月にはすべてハラスと名付けたその犬が中心にいた感じである。たかが一匹の犬ころがかくも大事な存在になるとは、まったく思いもかけぬ次第であった。

犬を飼いだしたそもそもの初めは、一九七二年三月、横浜の南端洋光台という新開地に引越したときだった。わたしが四十七、妻が四十四のとして、それまで夫婦は世田谷の六、四・五の二間しかない団地に二十年ほど住んでいて、自分たちは生涯そこに住むことになるんじゃないか、と漠然と予感し、それならそれで仕方がないと覚悟していた。それが思いがけず生のなかばに庭付きの家を持つ幸運に恵まれ、その結果犬を飼うことになったのである。

建築は終わったもののまだ庭もできていない家に引越したとき、妻の妹のN子に「新築祝いになにか差上げたいけど、何がいいですか」ときかれ、これは気の置けない間柄だから、「そうね、運動不足気味だから散歩用に犬でも貰うかな。あんまり大きくないのがいい」と答えた。当時わたしの犬への関心、知識はその程度のものであったのだ。

今ならわたしは必ずやそこに、「しかし、どうせくれるんならこれこれの犬種で、血統正

しく、姿形のいいんじゃないやだぜ」と条件をつけるだろう。なぜなら、その後いろんな飼い方を見て来た結果、犬ならどんな犬でもいいというような人は、結局はあまり犬を可愛がらないことを、いやになるほど見せつけられてきたからである。

どんな犬だって仔犬のときはしごく可愛らしい。で、初めのうちは、とくに子供たちが猫っ可愛がりするけれども、やがて大きくなってあまり見栄えのしない成犬になると、大抵は餌だけやっときゃいいんでしようというぐらいの飼い方になって、散歩もさせず繋ぎっぱなしにとくのが多いのだ。だが犬にとって散歩させられないくらいの苦痛はないし、そんな飼い方では犬との本当の睦みあいには生れないのである。

小説家の近藤啓太郎さんは、かつてみずから「八色犬舎^{やいろけんしゃ}」というのを経営していたくらいで、犬に関しては玄人といっているいい男だが、あるときタクシーの中でわたしにこう言った。「毎日犬の散歩をさせないようなやつは飼う資格がないよ。鎖で繋ぎっぱなしにしとくくらいなら、保健所にわたしてしまっただ方がよっぽど犬のためなんだ。」

近藤氏の言い方は乱暴だが、犬についての真実を衝いている。

むやみと吠えたり、遠鳴きしたり、人に噛みついたりする犬は、必ず繋ぎっぱなしにされてストレスのたまった犬で、責任は飼主にあるのである。

話がいきなり過激になったが、その点わたしの場合はそもそもの動機が散歩のためにあつ

たわけだから、その意味では知らぬまま正しい飼い方に叶っていたわけである。

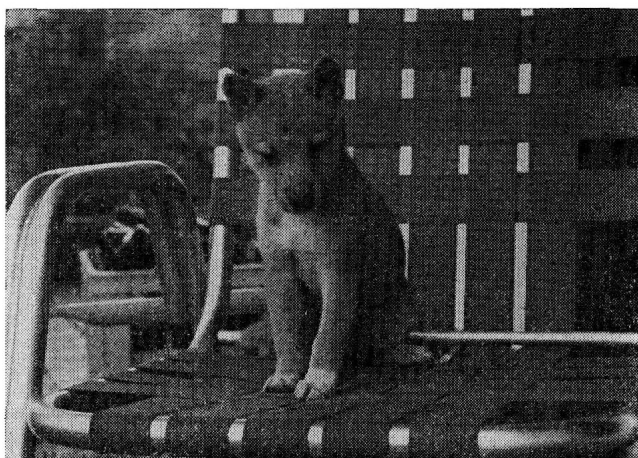
しかし、初めのうちわたしは、やがて飼うことになる犬が、たんなる犬以上の存在になるうとは、そのとき予感していたわけではなかった。

N子はその後熱心にほうぼうに手配してしてくれたらしく、六月になって「ちょうど生れたばかりのいい犬が見つかったわ」と知らせて来た。

妻は早速練馬の獣医のところに出かけた。母犬の腹の下で動き回っているのを見ると、五匹ともころころしていてみな可愛いが、とくに鼻の頭の黒いのが気に入った。そこでこれにしようかしらと言うと、母子をあずかっていた獣医は別の一頭をとりあげ、乳を呑むのも何でもこれが一番すばしくて元気がいい、これがいいと思いますよとすすめるので、迷ったすえ結局その犬に決めて来たという。一緒に生れたきょうだいでも、最初に生れたほうが元気がいいのであるらしい。

七月中旬、暑いさかりにクルマでそいつを引取りにいったときは大変だった。なにしろ初めて母親ときょうだいから引離されたものだから、仔犬は道中大騒ぎして、吠え、鳴き、あばれ、ちっともじっとしていないで、犬というものを初めて扱うわたしたちを大いに手こずらせた。仔犬は家についたときはぐったりしてしまっていた。

炎天下を運ばれてきたショックからか、さわぎすぎたせい、水は飲むものの何をやって



生後 40 日、わが家に来て 2 日目。以後、ハラスはこの椅子を愛用した

も食おうとしない。そのときははずいぶん心配した。そういうときは食わせないでじっとさせておくのがいいとはまだ知らなかったから、あれをやりこれをやっても食わないのに、夫婦とも慌ててしまった。最後に冷蔵庫から牛の生肉を持ってきたら、ようやく召し上って下さったのでほっとしたが、こうやって初めに甘やかしたことがやがてどういう結果になるか、夫婦ともむろん知る由もなかったのである。

が、食い終って、ようやく落着きをとれどし、椅子の上にちょこんと坐っている姿は、なんとも可愛らしい。わたしたち夫婦には子供がないので、まるでとつぜん子供をさずかったかのようなのである。そしてそのとき初めて犬に向って気持が流れたしてゆくのを覚えた。

獣医は仔犬を渡すときに血統書も一緒につけてよこしたが、あらためてそれを見るとなんでも大変な血統のようである。登録名は「甲武信号」と言い、父犬母犬にはさしたる賞歴がないものの、父犬の親は「倉田のイシ号」という日本一の賞を受けた犬だし、母犬の曾祖父には「コロ獅子号」というやはり日本一賞の受賞犬がいる。

あとで『柴犬』という本を買ってきてみると、両方ともちゃんと柴犬の名犬として写真がのっていてわたしを感激させたが、成長するにつれてわが家の犬にはその父方の祖父の面影が伝わっているかに、欲目には見えてくるのである。

人間については血統の尊貴などということ認めないわたしが、犬についてはそれを、有難がるというほどではないが、鼻がむずむずするくらいの感じを受けたのだから、妙なものである。もっとも、血統なんてものは、犬にとってもかえって迷惑なものかもしれぬと、やがて知るにいたるのだが。いずれにしろ、これがわたしたちがハラスを家族の一員に迎え入れた始まりであった。

仔犬はなにをおいてもまず可愛らしい。最初の晩は玄関に古毛布を敷いてねかせたが、親きょうだいから離されて淋しいのか、クンクン鳴く。そこで居間に入れてやると、ほうぼう嗅ぎ回ってからやがてころんと横になった。その寝姿が、いじらしくもあり、愛らしくて、何度でもそばに寄って見ずにいられない。

翌朝、庭におろしてやると、まだ木も何も植わっていない荒地のままの土の上を、ころころとまるいからだで元氣よく走りだした。皿に水を入れてだしてやると、ピチャピチャ音たてて飲む。そしてまた走りだす。そういう恰好、仕草、姿の一つひとつが、抱きしめてやりたいほど可愛らしく、いくら眺めていても倦きない。

ああ、これが生きものというものかと、そのとき初めてわたしに、犬を飼うことにしてよかったと、実感が湧いてきたのであった。

名の由来、その命名の効果

わたしはその仔犬にハラスという名をつけた。

HARRAS とは、ドイツ人が大型シェパード犬につけることの多い名である。

知る人ぞ知る、ドイツ・シェパードは、立てば人間の背丈を越えるくらい的大型犬で、日本ではまだ見たことがないが、漆黒のその猛烈な犬をドイツの知人が飼っていたのでわたしは実物を見て知っている。そういう超大型犬につける名を、わが家に来た小さな柴犬に与える滑稽さは自分でも重々承知はしていたが、あえてそれを選んだのは、この名に特別の愛着があったからだだった。

一九六九年にわたしは、現代ドイツの代表作家ギュンター・グラスの、日本風に言って千六百枚に及ぶ長編小説『犬の年』を、三年がかりで訳して出版した。これは、ナチスの勃興から、その全盛期、ヒトラーの死とドイツの壊滅、戦後の復興までの歴史を、物みな悠々と流れるポーランドのヴァイクセル河辺に生いたった二人の少年の立場から描いたもので、題